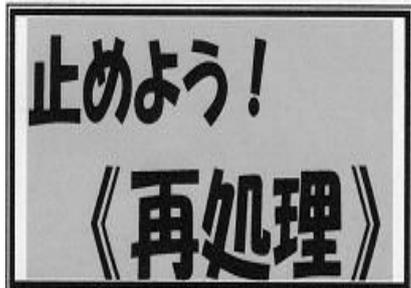


三陸の海を放射能から守る
岩手の会 (略称) 三陸の海・岩手の会
 郵便振替 02240-5-102650
 ホームページ《再処理 / 岩手の環境》
<http://sanriku.my.coocan.jp/>
 《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》
 2021(令和 3年)
 4月30日
 第216号
 編集事務局 S.Oshida
 TEL・FAX 019-623-1636

福島原発事故 10年目の真実 小児甲状腺がん検査の受診率、大幅に低下 「被ばくが原因とは考えにくい」…これが結論でよいのか？ 「事故時の子ども達」を守れ！

第40回検討委員会で公表の小児甲状腺がんの人数 2021. 1. 15 (資料4)

事故時18歳以下

検査回数	呼称	年度	対象者総数	受診者	受診率	穿刺吸引細胞診			癌手術済	1992年度生まれから2011年度生まれまでの人の該当検査時の年齢
						受診者	経過観察	悪性・悪性の疑い		
1巡目	先行検査	2011-2013	367,637	300,472	81.7%	547	431	116	102	0歳～21歳
2巡目	本格検査	2014-2015	381,244	270,540	71.0%	207	136	71	54	3歳～23歳
3巡目	本格検査	2016-2017	336,670	217,921	64.7%	78	47	31	27	5歳～25歳
4巡目	本格検査	2018-2019	294,240	181,005	61.5%	64	37	27	16	7歳～27歳
(25歳)	節目検査	2017～	66,637	5,578	8.4%	13	6	7	4	25歳
5巡目	本格検査	2020-2021	252,821	564	0.2%	2020年度実施対象市町村			0人	9歳～29歳
総計						909	657	252	203	(編集者作成)

注：手術済203人のうち1例は「良性」。この外に 福島県立医大外来で12人の手術あり。

*がん手術済み数：203人+ (県立医大外来) 12人=215人

第四十回福島県民健康調査甲状腺がん検討委員会 PDF 資料。 資料4 最末尾頁

(参考) 「甲状腺検査結果状況」より <http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/423828.pdf>

一月十五日福島県民健康調査検討委員会はこれまでの検査結果を総合的に公表しました。原発事故から十年目、当時生まれた乳児が一〇歳となり一八歳であった若者が二八歳となりました。検討委員会の資料ではこの一〇年間で二五二人が甲状腺がん或いはがんの疑い、とされ二一五人が手術を受けました。人生の出発点で被ばく被害を受けた彼らに無関心や偏見のもとにさらなる苦難を与えてはなりません。

「希少がん」と言われてきた小児甲状腺がん
 このがんは二一年間に百万人に一〜二人の希少がんと言われてきました。上図の二巡目の本格検査(二年間)の数字を例に検証すると、受診者数二七万五四〇人、がん手術者五四人、これは二一年間のデータであり一年にすると一三万五二七〇人が受診してがん手術者は二七人。百万人当たりに換算すると一三万五二七〇人・二七・一〇〇万人・X。X一九九・六人。百万人当たり二人と比較すると約一〇〇倍です。

受診率が減少しているのは大問題
 被ばく時子どもであった彼らも、社会人となり学校や親のもとから巣立って行きます。総括表から分かることは、原発事故被害を受けた調査対象世代が、今後、甲状腺検査を適切に受けることが非常に困難になってゆく現実です。

「福島県小児甲状腺検査の設計」の欠陥
 検討委員会は相変わらず「被ばくが原因とは考えにくい」としています。この一〇年間行われてきた「検査」は、被ばくの子ども達を追跡検査し早期発見早期治療を可能とした大切な検査です。しかし、何故か被ばくが原因か否かを「地域的、年齢的に比較する」という検査方針を欠いています。

「比較可能なデータの調査」を今すぐ実現を
 福島原発事故から遠い他県・他地域の調査が不十分であるのみならず、福島県内の「事故後に生まれてきた子ども達の検査」が行われていません。彼らに、小児甲状腺がん多発があるのか無いのか？それを比較すれば、「被ばくが原因か否か」は、すぐに明瞭になります。

子どもの甲状腺がんが減っても青壮年で増える？

前号において「原発事故後の子ども達の小児甲状腺がんの年次罹患率は、福島とチェルノブイリでは事故後急増し、その後減少し始めた」と記しました。それが「甲状腺がん発症の危険が減少し始めたから」であるなら好ましいことですが、年齢集団ごとの毎年の「甲状腺がん罹患率統計」であることを理解する必要があります。「子ども年代から大人の年代へ」と統計対象世代が移って行く事を考慮すべきです。

甲状腺がん罹患率年次推移



右のグラフは国立がん研究センター公表の「全国のがん罹患データ」と福島県ホームページの「甲状腺がんの年次罹患率」の全国と福島県の比較です。『二〇歳以

降』がどうなっているのか当然必要な統計です。注・但しこの二〇歳以降の福島県統計には、福島県のみが全員検査である「県民小児甲状腺検査」の数字が加わっていると考えられます。従って単純には比較出来ないことを考慮しなければなりません。

事故後青壮年層でも甲状腺がんが増加

上のグラフを見ると明らかに原発事故後二年目から青壮年世代でも福島県の甲状腺がん罹患率が増加し始めました。この年齢集団では、甲状腺がんは全国的にも、事故以前の福島県でも「十万人に四〜五人」です。しかし福島県は二〇一三年には十万人あたり七・一九人から二〇一七年には十一・三九人へと急上昇です。

全国的にも増加している

このグラフは本紙第一九九号掲載のものに、その後公表された二〇一六、二〇一七年のデータを追加したものです。よく見ると全国の罹患率も二〇一六年には福島県とほとんど同じ率です。全国的にこの青壮年世代でも甲状腺がんが増加しているとも考えられます。

二五歳を越えれば「五年ごと節目検査」

福島県民健康調査甲状腺検査は、子どもから大人になった人たちの受診率が激減しています。そのためか二〇歳を越えれば二年おき、二五歳からは五年ごとの「節目検査」とする方針が出されたようです。被ばくの事実があるのに学校を卒業後故郷を離れるなどで、甲状腺検査が適切に受けられなくなってしまうので、隔年から五年ごととはあまりに杜撰な方針です。

青壮年の甲状腺被ばく者の対策を具体化せよ

福島原発事故による甲状腺被ばくは福島県民だけが被ばくしたのではなく、全国的な問題です。そして青壮年になっても長く影響することを示しています。事故直後の甲状腺被ばくについてはほとんど測定されなかったことから被ばく線量が不明な人たちが大部分だったと思われまます。従って甲状腺がんなどの健康被害について因果を問わず保証をするなどの手厚い対策が必要です。

会員投稿白板

本本の紹介

我が岩手の会のルーツが書かれていた！

「エントロピー」

藤田祐幸 樋田敦共著
現代書館 一九八五年刊

終活ではないが、本の整理をしていて手にした「エントロピー」、少しページを捲ると、驚いた。賢治のあのマント姿と一緒に、森林を伐採するブルドーザーと「一本木を汚染するな RMC誘致反対 水資源・子供たちの未来を守る」とのタテカシがページいっぱい。詳しくは知らないが、三陸の海岩手の会のルーツは、RMC誘致反対の運動であったと聞いていた。岩手の会のルーツを語る本だ。

この本のヘディングに「FORBENERS」とあるが、「エントロピー」とは何かを初心者向けに書かれた解説本と言うよりも、「エントロピー概念」を軸に、

(こ)うい言葉が適当かどうか自信はないが、科学哲学史・近代合理主義批判、石油文明・原子力批判、環境論を縦横に論じている。「賢治」と「私」の会話の形で書かれていて、イーハトブ(滝沢村)から始まり、森の中の村(ポラーノ村?)の「老人」との語りで終わる。「私」曰く、「エントロピーは処理できるものとそうでないものがあるのです。放射性廃棄物は生態系の中で処理し熱に変えて、宇宙に捨てるということが出来ないのです。」放射能と人類(生物)は共存できない」と言われていること、これであるほど納得できました。賢治について疎い私ですが、なかなか奥の深い本だと感じました。賢治ファンや環境に関心のある方にはマスト本だと思います。(道)